



インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

二 搜索する男子と訪問する女子 その3

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

二 搜索する男子と訪問する女子 その3

★

坐道がアキホさんに、『縁を結ぶ術』をかけてから二日が経った。

昨日もアオイさんを探したけど、手掛かりは見つからなかった。

「心配しなくていいよ。坐道は普段はふざけたヤツだけど、こういう事に関して嘘はつかないからね」

昨日、搜索を終えて家に帰る時に、岩男さんはそう言った。

「……後は地道に探せば会えるのかなあ」
放課後、外を歩きながら僕は呟いた。

今日もアオイさんを探す事になっていて、岩男さんとアキホさんは朝から搜索を開始している。

僕は学校が終わった後にそのまま、二人に合流する事になっていた。

探す場所は、野良猫がアオイさんらしき霊を目撃した場所を中心に行う予定だ。

あ、そう言えば……

ようたはアキホさんを家に連れてきた日から、僕の前に姿を見せていないな……。

……まったく。

「アキホさんが早く、アオイさんに出会う事ができるといいのだけど……」

いつも一生懸命になって探しているアキホさんを見てみると、そう思う。

「おい。リヨウ君」

集場所までもう少しといった所で、前方に岩男さんの姿が見えた。

「岩男さん、どうですか？」

駆け寄って、僕は訊ねた。

「いや、アオイさんはまだ見つかっていない」

岩男さんは首を横に振った。

「そうですか」

「今は、アキホさんと探す範囲を分担して搜索しているよ」

岩男さんは続けて言った。

「リヨウ君。アオイさんの事ではないのだけれど、

実は妙な情報を得たんだ」

「妙な情報ですか？」

「うん」

頷いて、岩男さんは続けて言った。

「今日は朝から猫を使って搜索をしていたのだけれど、何匹かの動物が昨日の夜から、嫌な空気を放つ

霊を目撃したらしい」

「嫌な空気を放つ霊……ですか？」

「そうだ。と、少し陰しい顔つきで岩男さんは頷いた。」

「その霊の姿は人型で、唸りながら浮遊していたらしい。動物たちの感じた雰囲気から察するに、他の霊や人間に対して害を与える可能性も考えられる」

「僕の日を見て岩男さんは続けて言った。」

「リヨウ君。今日の捜索に君は加わらない方がいいのでは、と私は思っている」

「え？」

「考えすぎだとは思うのだが……。と、岩男さんは敵しい表情を見せた。」

「リヨウ君に敵意をもっている、『あいつら』が、私たちを攻撃するためにその霊をこの町に放った

……。と、そういう可能性も考えられる。だから私としては、身を守るためにもリヨウ君は家に帰った方がいいと思っているのだが」

「……『あの人達』が、僕たちの居場所を特定するには、その……まだ早すぎると思います」

「言い訳をするように下を向きながら、僕は岩男さんに言った。」

「そうだね、私もそう思う。しかし、少しでも可能性が考えられるのなら、やっぱり私としてはリヨウ君の身の安全を優先させるべきだと思う」

「……岩男さんの言いたい事は、よく分かります。だけど……」

「魂と引き換えにしても友達に会いたい、と願うアキホさんの事を思うと僕は……。」

「……うん、分かったよ」

「やれやれと言った感じで笑いながら、岩男さんは言った。」

「リヨウ君だったら、『それでも探す』って言い出しそうなのは、何となく予想していたし」

「そ、それじゃあ……！」

「ただし！」

「右手の人差し指を立てて、岩男さんは続けて言った。」

「今日の捜索は夕方までだ。その時間になったら、リヨウ君には家に帰ってもらうよ」

「はい。分かりました」

「うん。それじゃあ、アオイさんの捜索を続けようか」

「はい！」

僕と岩男さんは歩き始めた。

☆

「丁度、前に仕事で使った、『いいモノ』が車の中にあるから取ってくるね」

そうやって理華さんは、リビングから出て行った。

「いいモノ……?」

「多分、怪しげな仕事道具の事だろう」

「仕事、道具ですか?」

「ああ」

頷いて、夏美さんは私に言った。

「さっきも言ったけど、理華は霊などに関わる仕事をしている。その時にアイツは、いろいろと道具を使ったりするんだ。その仕事道具を取りに行ったのだと思う」

「はあ……そうなんですか」

「どんな道具なのだろう? と、私は少し興味が湧いてきた。」

「理華の知り合いに、そういった道具を開発する会社に勤めている人がいるらしくて、たまに、『試してみろ』と俺にも押し付けてくるよ」

「へー」

「……特に、使うとリスクがありそうな危険な物を俺に押し付けてくる」

「そ、そうなんですか……」

ふー、と夏美さんは息を吐いた。

「俺からみたらどれも怪しい道具だけど、結構使えはするよ」

「誰が怪しい女だって?」

瓶のような物を手に持って、理華さんが戻ってきた。

「お前の事が怪しいとは言っていないだろ」

「言っただけでなくても思っただけでいるでしょ」

「まあな」

まったくもー、と言いながら理華さんはソファアームに座り、目の前の机に瓶を置いた。

近くで見ると瓶の中には液体が入っていた。

「それが使えそうな道具か?」

瓶を指差して夏美さんは訊ねた。

「そうだよ」

指で軽く瓶を弾いて理華さんは言った。

キン……と、鈍い音が響いた。

「要は、そのアキホさんという霊を探すってのが、これからの方針なんでしょ?」

「ああ」

「アキホさんが生前に行動した場所を探していけば会えるかもしれないけど、何らかの理由で会う事が難しい状況にある……って場合も考えられよねえ」

理華さんは続けて言った。

「そこで、『これ』を使えばアキホさんと会える確率がグンと高くなる」

ほん、と軽く瓶を叩いて、理華さんはニヤリと笑った。

「何やら凄そうだね……」

ずっと存在感を潜めていたシマさんが、私にこそつと言った。

「どう使うんだ？ それ」

目を細めて夏美さんは理華さんに訊ねた。

「簡単よ。この瓶の中に入っている液体をアオイさんが飲んで、吐くのよ」

「吐く？」

「そう。吐くと不思議な液体が出てきて、目的の霊まで導いてくれるわ」

ふふん、と得意げに理華さんは言った。

「『不思議な液体』って何だ？ お前の知り合いが作ったものだろう。そもそも、瓶の中に入っている液体は何だ？」

「んもー、うるさいなあ、みっちゃんは。私もこの中身の詳しい成分とか何て知らないよ。知らなくても使ったら実際に効果があったんだからいいじゃない！」

抗議するように理華さんは言った。

「……という事だけど、どうしますかアオイさん？ これ、使ってみます？」

アオイさんに視線を向けて夏美さんは言った。

「……はい。それでアキホに会えるのなら、ぜひ」
頷いてアオイさんは言った。

「直ぐに決心できるなんて素敵だねえ」

それじゃあさっそく始めようか、と理華さんは言

った。

「理華、使用すると副作用とかはあるのか？」

「いや、特にはないよ。そこら辺は安心していい」

「そうか」

「本当に心配性だよね、みっちゃんって」

呆れたように夏美さんを見て理華さんは言った。

「うーん……と、それじゃあアオイさんはそこに立つてね」

理華さんはリビングの中を見渡し、何も置かれていない場所を見つけると、その場所を指差してアオイさんに指示した。

「はい」

すうっと、アオイさんはその場所へと静かに移動した。

「次に、この瓶を持って」

アオイさんの傍まで行くと、液体の入った瓶を理華さんは渡した。

「分かりました」

作り物のように白く綺麗な手で、アオイさんは瓶を受け取った。

ん？ そう言えば霊って物を掴めたりするのだからか……。今まで特に意識したことはなかったけど……。

私の中に芽生えた疑問をよそに、目の前の状況は進んでいった。

「そして、瓶の中身を一気に全部飲み干す！」

「ぜ、全部でしようか……？」

戸惑いの表情を浮かべて、アオイさんは理華さんに訊ねた。

「うん、全部」

瓶の中身は、少し大きめの缶ジュース一本分くらいの量だろうか。

「大丈夫、大丈夫。前にこれを使った人も、アオイさんみたいに細い人だったけど飲み干せたから」

「は、はあ……」

アオイさんは、持った瓶を目の前にかざして、改めて中身を確認した。そして、軽く息を吐くと。

「では、いただきます」

と言って、瓶の中身の液体を飲み始めた。

「ど、どうなるのかな？」

緊張感を含んだ声で、シマさんは私に囁いた。

「ん……」

少し苦しそうな表情を見せたアオイさんだったが、なんとか瓶の中身を全部飲み干す事に成功した。

すると。

「う……！！」

口を押えてアオイさんはその場に蹲うずくまった。

「アオイさん！」

私は慌ててアオイさんに駆け寄ろうとした。

しかし。

「大丈夫だって。たまちゃん」

理華さんは右手を上げて、私の動きを止めるようにして言った。

「うっ」

蹲ったアオイさんは、びちゃり、とその場に紫色の液体を吐き出した。

すると。

「え？」

アオイさんが床に吐き出した液体は、ふよふよとその場に浮かび上がった。

「気分はどう？」

アオイさんが立ち上がるのを手伝いながら、理華さんは訊ねた。

「ええ……大丈夫です。それで、これは……」

ふよふよと、まるで重力を無くしたように浮かんでいる紫色の液体を見てアオイさんは呟いた。

「成功したね」

ニヤツと笑って理華さんは言った。

「理華、その液体がアキホさんの所まで導いてくれるのか？」

夏美さんが訊ねると。

「ああ、この、『不思議』なモノがね」

と、理華さんは答えた。

★

「……アキホさんはね、どうやら自殺したらしい」
「え？」

アオイさんを探して歩いていると、唐突に岩男さんは僕に言った。

「朝、一緒に捜索している時に彼女が話してくれたんだ。『私は自殺したんです』ってね」

岩男さんは続けて言った。

「彼女は昔から繊細な性格だったようで、それで人間関係などに苦しんでいたらしい。そんな時に会ったのがアオイさんだった、と」

「そう……ですか」

「霊だったアオイさんを初めて見た時は驚いたようだけど、話をしたりしているうちに直ぐに親しくなった、とアキホさんは言っていた」

岩男さんの話を聞いていると、必死になってアオイさんを探す、アキホさんの表情が自然と僕の心の中に思い浮かんだ。

「アオイさんと知り合った事で、アキホさんの心には安らぎが生まれたようだけど……それでも彼女は生きていく事がだんだんと辛くなっていったようですね。それで……」

それで、アキホさんは自殺を……。

「アキホさんは話の最後に、『アオイは私が自殺し

た事に対して、とても怒っているのかもしれない……だから私に会いたくないのかも……』と、悲しそうに言っていたよ」
「……」

もし……もし、アオイさんがアキホさんを強く拒絶して避けていたら……。

坐道の力を疑う訳ではないけど、少しだけ、このままでアオイさんに会う事はできるのだろうか？と、僕は思ってしまった。

☆

「おい、理華。これ、浮かんだままどこにも行かないぞ」

アオイさんが紫色の液体を吐き出してから、十分ほど経った後に夏美さんは言った。

「そう焦りなさんな。この、『不思議ちゃん』は必ずアキホさんの元に導いてくれるから」

「必ず、だな？」

「うん！……まあまあ、必ずかな」

「まあまあ？」

「絶対！ 多分……！ メイビィ……」

「おい、表現がだんだんとボヤつとしてきたぞ！」

「冗談だって」

夏美さんと理華さんがそう言い合っている

「あ、少しだけ動いた！」

浮遊する液体を近くで観察していたシマさんが驚いた声を上げた。

「本当だ！ でも、何だか遅いね……」

浮遊した液体は、のろのろと少しだけ動くと、また止まった。

「アキホさんの元に着くまで何日かかるんだ……」

と、夏美さんは呟いた。

「まあまあ。気長に待ちなっ」

にこやかにそう言うのと、理華さんはちらりと腕時計を確認した。

「あ！」

時間を確認した理華さんは大きな声を上げた。

「どうした？」

夏美さんがそう訊ねると。

「えっとお……私、今日は他にも用事があるから帰るね」

と言って、理華さんはリビングから去ろうとした。

「おい、理華！ どうするんだ、コレ」

液体を指差しながら夏美さんは訊ねた。

「みっちゃんたちはただ、それについていけばいいよ。それじゃあねー！」

そう言い残すと、理華さんは玄関へと消えていった。

「……あいつの、あの感じには慣れねえ」

頭を掻きながら夏美さんはそうぼやいた。

それから、私たちは液体を観察する事にした。

しばらくは浮いたまま止まっていたけど、一時間ほど経つとまたのろのろと動き始めた。

「相変わらず動きは遅いが、今度は進み続けているな」

「そうですね」

「どうやらこの様子だと玄関の方へと向かっていきそう。とりあえずコレの後を追いかけてみよう」

「はい」

その後、外出の準備をした私たちは、液体を追いかけて外へと出た。

それから数時間後。

「夜になってしまったな」

歩きながら夏美さんは言った。

「そうですねえ」

辺りはもうすっかりと暗い。

「湖君、俺はまだコレを追いかけてみるけど、君たちはどうする？」

気遣ってくれたのか夏美さんは私たちにそう訊ねた。

「私はまだ残りたいと思います……」

アオイさんはそう言うのと、私とシマさんの方を見た。

「ですが、たまさんとシマさんはもう遅い事ですし……」

申し訳なさそうな表情でアオイさんは言った。

「私も、まだ追いかけますよ！ この液体の行方が気になりますし」

私はそう言った。

このまま帰っても気になると思うし。

「もちろんアタシも残るよー！」

シマさんはグツと親指を立てて言った。

「……ありがとうございます」

微笑んで、アオイさんは言った。

思わずドキッとしてしまうくらいに、アオイさんの笑った顔はとても素敵だった。

「よし、分かった。それじゃあこのままコレを追いかけて……ん？」

「どうしたんですか、夏美さん？」

私は訊ねた。

「いや、何かコレの動きがまた遅くなったような……あ」

ゆっくりと動いていた紫色の液体は、ピタリと動きを止めた。

「どうしたんだろう？」

シマさんが紫色の液体に顔を近づけた。

すると。

「わっ！」

空中に制止した液体は急に、しゅうしゅうと音をたてて、蒸気のようなものを放ち始めた。

「理華のやつ、こんな事になるとは説明していなかったぞ……」

液体を凝視しながら夏美さんは言った。

「あ……」

蒸気を放つ液体は紫色から赤色に変わると、そのまま上空へと吸い込まれるようにして消えていった。

「……いつちゃった」

呆気にとられて、私は思わず呟いた。

「……」

数秒、私たちの間に沈黙が訪れた。

「どういう事なんだ……」

こめかみを押えながら夏美さんは溜息を吐いた。

理華さんは、液体がアキホさんの元へと導いてくれると言っていた。

しかし、液体は蒸気を放ちながら、夜空へと消えていってしまった。

「この近くに……アキホが、いるのでしょうか」

ポツリとアオイさんが呟いた。

「え？」

それって……

「……なるほど。アキホさんの近くまで俺達を連れてきたから、役目を終えたアレは消えた……とも考

えられるか。アレが不良品じゃなければな」

と、夏美さんは考えるように言った。

「じゃ、じゃあ。この近くを探せばアキホさんが……！」

興奮したようにシマさんは言った。

「うん。可能性はある。とりあえず、この辺りを探して……っ！」

急に、夏美さんの顔が険しくなった。

「夏美さん？」

「……この気配は……何か、よくないモノが……近いな……」

ぶつぶつと呟きながら、何かを感じた様子の夏美さんは後ろを向いた。

「あそこか……！」

すると。

ドカン！

と、大きな音が町中に鳴り響いた。

音の出どころは、夏美さんが今、振り向いて見た方からのようだった。

「くそっ」

音のした方向へと夏美さんは駆け出した。

「な、夏美さん？」

「君たちは、そこにいて！ 動かない方がいい！」

振り返って私たちにそう言うと、夏美さんは走って行ってしまった。

「な、何がどうなっているの？」

私の服の袖にしがみつきながらシマさんは訊ねた。

「わ、分からない。だけど……」

だけど、何かとても「ヤバそう」な事が起こったようだと、直ぐに理解できた。

つづく